Three Days

天空 海

一

「わたしは、あんたが思うておるような、恥ずかしいことなどしていないのよ」

鶴松は、稲生沢川の上流にある「お吉が淵」と呼ばれるようになった川淵を、ぼおっと眺めていたとき、急におきちの声を聞いたような気がした。

鶴松が、おきちが身投げをしたという噂を聞いたのは、身投げから一年近くを過ぎた、明治二十四年（一八九一）になってからのことだった。

隠居の身ゆえに、すぐに旅立てるかと思ったが、横浜から下田に行くだけなのに、鶴松の周囲は、容易に出立を許してくれなかった。

それでも、噂を耳にしてから一月後には、やっとのことで、大工見習の若衆一人を連れて、伊豆に向かった。

まず、身投げしたという「お吉が淵」を見ておかねばならない、と思い、この地にやって来た。

そこで、さきほどの声を耳にしたのだった。

風が強く、木々の枝が出す音かとも思ったが、おきちの魂が、このあたりに漂っていて、声をかけてきたような気がしていた。

一度は夫婦同然であったこともあり、おきちの足跡のある場所で、香花を手向けて、回向するだけのつもりでやって来たのだが、あの声を聞いた瞬間、おきちとの間のわだかまりをもう一度、見つめ直してみたくなった。

二

元号が、慶応から明治に変わった年（一八六八）、横浜で大工仕事をしていた鶴松を追って、おきちが、鶴松の住まいに押しかけ、そのまま、同居人となっていた。

傍からみれば、夫婦だった。

が、鶴松は、おきちを捨てて、新天地でやり直したいと横浜に来たので、同居して共同生活を送ることには異を唱えなかったものの、男女の仲に戻ることには抵抗があった。

「あんた。そんなに、わたしが許せないの。船頭たちの酌をして、相手をするのはよいと、言っていたじゃない。あの米利堅さんとは、本当に何もなかったのよ。何度も説明したじゃない……」

おきちが、ときおり、下田での米国使節（駐日総領事）、ハリスのもとに奉公したときのことを、叫ぶように言いわけをするようになったのは、同居して二年ほど過ぎたころだった。

最初に押しかけて来たころは、おきちの口癖は、鶴松さんと暮らせるだけで本望だ、と繰り返して言うだけだった。

それが、無口な鶴松の何とも言えない、歯がゆいほどに、おきちを女として見ていない態度が、二年余りも続くと、我慢がならなくなったのだった。

ときおり、過去の言いわけをするようになって、さらに一年を越えるころには、おきちは、次第に毎日のように、鶴松を責めるようになっていった。

「あの津波で借金ができなけりゃ……。いいえ、それもあったけど、お上のお指図に従って、メリケンさんに奉公したことが、そんなに気に障ったのかい。あんたが助けてくれたなら、と何度も思ったけど、独り立ちしていないあんたには無理だったし、誰も助けてくれなかった。おっかさんは、わたしだけか頼りだって言うし、……。どうしたら、よかったのさ。ねえ、教えておくれよ……」

鶴松は、おきちに両肩を揺さぶられながら、横を向いていたが、しばらくすると、おきちの顔をうかがうように見て、あのとき聞いたのさ、と呟いた。

おきちが、手を離し、怪訝な顔で、誰に何を聞いたのさ、と鶴松の顔をのぞき込んだ。

「おれも、みなが言うことは信じなかったさ。おきちがあんなメリケン野郎なんかに身を任すような女じゃないと思っていたさ。それでも……」

鶴松は、おきちも知らなかった話を、ぽつりぽつりと語り始めた。

三

おきちが、ハリスの宿舎であった玉泉寺に、奉公に出て、僅かな期間で解雇された後、短い奉公であったにもかかわらず、異国の赤鬼のような者に肌を許した恥知らずな女だ、と下田では評判だった。

鶴松は、おきちの家庭事情に通じており、幼いころから、将来を誓った仲でもあったので、おきちの気性はよく知っており、やむを得ず異国の者に奉公したとしても、肌を許すことなどはない、と信じていた。

が、おきちの母と兄が、その後、お上に対し、おきちの給金が不足していた、などと訴えていることを見聞きしていると、不審の念が僅かに起こり、それが心の中から拭いきれず、さりとて、おきち本人に、事実を問い質すわけにもいかず、大工仕事を終えると、玉泉寺の周囲をうろうろと歩きまわる生活が続いた。

何か特に当てがあるわけでなし、かといって、何もしないまま、疑念を抱えて暮らすことなどはできそうになかった。

武士や僧あるいは物売りなどの出入りは、毎日あったが、誰一人として、鶴松の顔見知りの者がいなかったし、見知らぬ者たちへ声をかける勇気も持ち合わせていなかった。

毎日の日課となった、玉泉寺周辺でのひとときは、鶴松にさまざまな想像とおきちへの愛憎の念をもたらした。

ある日、鶴松は、異国の男とその侍妾らしき女が従者二人を連れて、寺の境内から出てくるのを見かけた。

鶴松は、一瞬、躊躇したが、すぐに気を取り直し、慌ててその一団に走り寄り、その傍らに平伏した。

「お願いいたします。こちらに奉公していましたおきちの知りよりの者ですが、何卒、そのときの話を……、何卒、お教えください……」

それをきっかけに、鶴松の頭上で、何やら話し合いが始まったようだったが、頭に血が上っている鶴松には、その内容がよく分からなかった。

しばらくしてから、おふくと名乗る侍妾らしき女が、鶴松に向かって、どんな用件か詳しく話してください、と身を屈めて、尋ねてくれた。

「ここにおきちという娘が奉公に上がっていたのを知っていなさるか。もし、知っていなさるなら、そのときの様子を教えていただきたいと思いまして……。わしは、おきちを嫁にもらおうと思っておった者なので、そのあたりを教えていただきたいので……」

おふくは、にこりと鶴松に笑顔を見せ、鶴松の意図することが分かったとばかりにうなずき、ヒュースケン様に申しあげてみます、と言って身を起こすと、身振り手振りで、異国の男に、鶴松の申し出を伝えていた。

ヒュースケンは、顔だけ上げて地面に這いつくばっている鶴松を、ときおり、見ながら、にこやかに、おふくの話を聞いていた。

突然、ヒュースケンは、オー、と叫んだ。

「すりですね」

鶴松には、そう聞こえた。

ヒュースケンは、身を屈めて、鶴松の肩を、ぽんぽんと軽く叩くと、再度、すりですね、と言って、笑いながら立ち去っていった。

鶴松は、地面に手を付いたまま、しばらく、ヒュースケンが言った言葉を噛み締めていた。

外国の言葉のような、日本の言葉のような、よく分からない言葉だったが、二度とも、すりですね、と言ったものと思われた。

その意味が、何かの謎かけなのかが、分からないが、ヒュースケンの笑いは、こちらを嘲笑しているのではないか、と思われた。

そうして考えると、赤鬼と恐れる異国の者に肌を許して油断させ、あっという間に大金を掏り取っていく、掏摸（巾着切り）のような女だった、と言っているのではないか、と思いついた。

いやいや、異国の者が、そんな難しい謎かけをするだろうか、と思い直したり、あの馬鹿にしたような笑いには、金さえ払えば、貞操など微塵も考えない女とその関わりのある男への侮蔑があったのではないか、と思い込んだりなどして、玉泉寺周辺をうろつく前よりさらに深い、奈落に突き落とされたような気分になっていた。

幼い頃から、憧れのような想いで見つめてきた、あの愛らしいおきちが、そんな外道に成り果てたか、と思うと、自然と身体が震えてきて、立ち上がることすらできなくなっていた。

水無月に入って、この下田では、ほどよい陽光が、人々の心を和ませる季節だったはずなのだが、鶴松の心は凍てつき、己れの思いの外は、何ものをも受け容れない、頑ななものになりつつあった。

どうしてくれようか。

この暗く惨めな気持ちが払拭されるまで、おきちを罵り続けようか。

いや、そんな鶴松の気性にあわないことをすれば、その怒りは高まり続け、身体を駆けめぐって、出るところを失い、身体を破壊してしまうかも知れない。

だが、責めないとしたら、この現実を受け容れることができようか。

それも、できないものと思った。

ならば、取るべき道は、一つだけだった。

逃げる。

そう、おきちのいない世界に逃避するしか、鶴松の生きていくための棲家はないものと思えてきた。

こちらが何も悪事を働いたわけでもないのに、逃げるというのは、不条理だとも思ったが、ともかく、このままおきちの側にいることは、身の破滅だという恐怖が、すべてに優先し、ほかのことは考えないことにした。

そのまま、鶴松は、身一つで逐電した。

それからは、あちこちを転々と移り住んだ。
一箇所に留まると、おきちが追って来はしないか、と不安だった。
それも、二年ほどの歳月のうちに、自然と気にならなくなっていた。
逐電から二年を経た安政六年（一八五九）六月、鶴松は、横浜が異人（異国の者）向けに開港されるという噂を聞き、大工が多く集まるだろうと考えて、そこに居を移した。
案の定、目まぐるしいほどに忙しい普請が続き、さらに、十年余りを経て、鶴松は、おきちが遠い存在になり、もはや恐れは消え去り、むしろ、懐かしく思い出されるようになっていた。
三十歳を越えても、独り身でいるのは、おきちが忘れられないでいたためか、女そのものがおきちと重なるようで汚れたものとして避けてきたのか、自分自身ですらよく分からなかったが、十余年に渡る独り身が心の平穏を作ってこれたような気がしていた。
そこに、ひょっこり、とおきちが現れた。
驚いた。
が、やはり、懐かしくもあった。
おきちの口上など、よく聞いていなかった。
ただ、二十歳半ばを越えたばかりという年齢にしては、疲れが、細い皺となって顔に出ていた。
笑顔のうちに、憂いの影も見えた。
そこが不思議なところだった。
鶴松の頭の中で、遠ざけたかったおきちとは別人のような、どことなく影があるところが、妖しい美しさを秘めているようで、心魅かれるものがある、と思えた。
少し怖いが、手元において眺めていたい、と思った。
そのまま、何となく、おきちの言葉ではなく、その姿に見惚れて、同居を応諾してしまった。
が、一月ほど同居してみて、それがあまりにも安易な気持ちだった、と後悔した。
鶴松は、目を楽しませてほしいだけだったが、おきちは、より現実的だった。
おきちは、昼間には、よく働き、同居人として満足し、生き生きとしているようだったが、夜になると、艶のある声で咳きをしたり、ため息を吐いたりなどして、鶴松を誘っているようであった。
ただ、鶴松は、二人の布団の間隔が一間足らずであるにもかかわらず、まるで、海峡を挟

んだ異国同士のように離れたものとして、おきちの動向に無関心だった。
また、おきちも、空咳やため息などまでで、それ以上の行動はとらないでいた。
おきちには、それなりに遠慮があり、十年余りの空白をゆっくりと埋めていこうとしていながらも、ときおり、鶴松に甘えたくなるときがあるのだろうと、鶴松なりに理解していた。
それでも、鶴松には、日毎に、おきちの存在が、重くのしかかり、また、ときおり、ヒュースケンと会ったときの夢を見た。
それは、大きな警告となって、鶴松を萎縮させ、おきちに対し、さらによそよそしく接する原因となった。
そして、再会から三年後、おきちの怒りに思わず、ヒュースケンと出会ったときのことを吐露してしまったのだった。

四

「わたしが巾着切りのような女ですって……。どうして通詞をしていたあのメリケンがそんなことを……。どうして、他人の言葉ばかり信じて、わたしの言葉を信じてくれないの。どうして、あのとき、そう言ってくれなかったの。どうして……」
おきちが鶴松の胸元に顔を埋めて泣き出しても、鶴松は、抱き締めることができずに、身を固くするばかりだった。
「もう、これくらいで止さないか。もう、俺は逃げない。けど、おきち、今度はおまえが出ていってくれないかい」
しばらく、うっうっと泣き声をひきずっていたが、おきちは、急に顔を上げ、怒りで膨らんだように目の周囲を隆起させ、鶴松をにらみ付けた。
「そんなことをよく言えるわね。誰も信じてくれなくても、あんただけは信じてくれると思っていたのに……。確かに、お金で身を売ったと言われれば、そうかもしれない。借金はあるし、わたしの稼ぎだけじゃ、おっかさんと二人で生きていくにも足りないし、親戚もみな、助けてはくれない。身売りの話をする奴もいたよ。でも、メリケンに奉公するのは、みんなで反対したのさ。貧しいなりにも体裁があるからね。でも、奉公に上がるというだけで、支度金が二十両とか三十両と言われれば、首をくくる寸前のわたしには、とうてい、嫌とは言えなかったさ。それだけあれば、借金を返して暮らして行ける、あんたと所帯を持てる、と思ったからね。それで、死んだつもりで、奉公に上がったのよ。でも、二日目にメリケンの寝所に入ったら、よく分からないけど、あんたの顔が、急に浮かんできて、一生懸命、助けてくれ、あんたへの操を立てさせてくれ、と泣き叫んじゃったのさ。そうしたら、……。そ

れだけで、あのメリケンさんは、とうとう一度もわたしの身体に触らずに、解き放ってくれたのさ。でも、たった三日間、異人の宿所となっていた玉泉寺にいたというだけで、みんなが、鬼に抱かれた女、異人に肌を許した女ということで、唐人お吉なんて呼んで化物扱いじゃないか。そのうえ、以前やっていた仕事も、船頭さんたちが嫌がるもんだから、酌も洗濯の仕事さえもまわってきやしない。それで、先行きを心配したおっかさんが、お上にお給金をねだったりしたもんだから……。何もなかったのに、お給金を欲しがったから、金を盗ったって言われても仕方がないかも知れないけど、だけど、こんなに惨めな生活に追い遣られ、挙げ句の果てに、初めて肌を許したあんたからも見捨てられたら、どうすればいいのさ。長い歳月我慢して、やっとのことで許してもらえたと思ったら、今度も、消えてしまえというのかい。鶴松さん、わたしが、嘘つきで、恥知らずな女でなかたことは、あんたが一番よく知っていてくれるものと思っていたよそれだけを頼りに生きてきたのに、本当に、馬鹿だよね……」

鶴松は、おきちの身体から次第に力が抜けてゆき、最後は虚ろな目になって、視線を下に落としたのを見て、憐れだな、と思ったが、それでも、おきちの言葉が、どうしても信じられなかったし、この修羅場を乗り越えるには仕方がないな、と腹をくくった。

それっきり、二人は、言葉を交わさずに、一日を過ごした。

翌朝、鶴松が目覚めると、おきちの姿は、はじめからこの家にいなかったように、消えていた。

鶴松は、おきちの痕跡が残っていない事実に、ほっとした。

それとともに、ほんの僅かだが、胸に痛みを感じた。

その存在が消え去ると、一瞬だけ、何だか、酷いことをしたのではないか、とも思ったが、いやいや、これでよかったのだ、と己れに言い聞かせるように、呟いた。

それからの二十年、鶴松は、下田で旧知の者に会うたびに、おきちの消息を聞き、無事暮らしていることに、安堵し、これでよかったのだ、という思いを深めた。

おきちは、別れた直後に、下田で髪結店を開き、次いで、三島に移り、再び下田に戻ると、小料理店を開いたとのことだった。

そして、最後に聞いた話が、破産の挙句に自殺という、鶴松を動揺させるものだった。

五

お吉が淵で、そうした三十年ほどを回想し、鶴松は、川を上り下りする船頭の姿に、ふと、目を留めた。

ある光景が、船の中に映し出された。

おきちが玉泉寺へ奉公に出る二月ほど前、いつもおきちをひいきにしてくれた船頭たちが、いずれは夫婦になるという、おきちと鶴松を船に乗せ、稲生沢川の河口からこのお吉が淵あたりまでを往復してくれたことがあった。

おきちが、この地を、人生終焉の地としたのは、生涯で最も楽しい思い出のある場所で、その思い出を死に装束として、旅立ちたかったのではなかろうか。

いや、きっとそうに違いない。

鶴松は、そこで、何故、あのときのことを三十年も忘れていたのか、と己れを責めた。

もし、その暖かい想いがあったなら、おきちの言葉に耳を傾け、おきちを信じてやれたのではないか、と思った。

おきちも、最期にあたり、その願いも込めて、命を捨てたのではないか。

そう考えると、遅くはなったが、おきちを信じていたら、と思って、あのヒュースケンの言葉に隠された真実を突き止めなければならない、と腹を決めた。

もっとも、ヒュースケンは、三十年前に、暴徒によって暗殺されていたから、確認しようもないが、あのとき、仲立ちをしてくれたおふくという女が生きていれば、何か手掛かりが残っているかも知れない、と考え、おふくの消息を尋ねるため、下田での知人の家を訪ねた。

おふくの消息は、意外にあっけなく、知ることができた。

皮肉なことに、おふくは、ヒュースケンに四か月足らず奉公した後、稲生沢川の船頭宿に嫁入り、今ではそこの女将となっている、とのことだった。

おきちの言葉を信じなくとも、ほんの数日で解雇されたおきちが「唐人お吉」と蔑まれたのに対し、長く異人に抱かれていたということが支障とならず、おふくの方は、嫁入りが叶ったというのは、鶴松には衝撃的な事実だった。

しかも、おきちは、船頭たちに嫌われて船宿での仕事がままならないのに、おふくは、船宿の嫁として、重宝されていたというのは、あまりにも理不尽な仕打ちではないか、と思った。

が、その源が、鶴松にあったとしたら、と思いつくと、鶴松自身が、おきちの不運な人生すべての鍵を握っていたのではないか、と恐ろしくなった。

確かに、奉公の実態は、当事者以外の者には推測であり、許婚者に見放された女と嫁に入った女を比較すれば、事実は別として、前者が淫らに異人に肌を許した女と決めつけやすく、後者は、何事もなかったから、それなりの家に嫁ぐことができた、と見られたのかも知れな

かった。
おふくの現況を知って、なおのこと、あのときの真実を聞き出さねばならないと、鶴松は、これまでの人生になかった情熱のような、熱い想いを抱いていた。

六

知人の家に泊まった翌日、鶴松は、船宿の忙しさが一息つく、午前十時頃を目処に、おふくが女将となっている船宿に向かった。
三十年ぶりの再会は、鶴松を、また、驚かせた。
面影は残っているものの、おふくは、落ち着いた身のこなしで、客を応対し、しかも、生き生きとして、船宿そのものの一部となっているかのように動いていた。
鶴松が、簡単に用件を申し入れると、おふくは、目を大きく見開き、ああ、とため息を吐いた。
「身投げする前、おきちさんが、ときおり、ここにも顔を見せていたので、言おうか言うまいか、だいぶ迷っていたんですけどねえ……」
おきちが生活費に事欠き、おふくを頼ってくるので、その度ごとに、金を融通していたが、酒代とするな、と言い添えて渡していたので、とうとうそこまでは言いそびれてしまったわ、とおふくは、ぽつりと漏らし、話し始めた。
「玉泉寺で鶴松さんに会った後、しばらくして、ヒュースケン様がおっしゃったのよ。あの二人は、寄りを戻したのだろうかってね。それで、わたしは、鶴松さんが血相を変えていたので、ヒュースケン様の言葉がよい意味だと思わなかったのではないか、と申し上げたのですよ。すると、ヒュースケン様は、小首を傾げ、ああ、日本語で話さなかったな、と苦笑いなさって、言われたのよ。ＴｈｒｅｅＤａｙｓね、と言っただけだから、何を誤解したのかな、とね。たった三日だよ、と言われたそうなのよ。たった三日で手放すくらいだから、抱くどころか、何もなかっただろうよ、という意味でおっしゃったらしいと言うのだけど……。でも、あのときの鶴松さんの顔を思い出すと、何か大きな勘違いをなすったんじゃないかと心配していたのよ……」
鶴松は、頭を殴られたような衝撃を受け、脂汗が止め処もなく出てくるのを感じ、ぽつりと呟いた。
「スリですね、と聞こえたんだ。金のありそうな奴から金を擦り取っていく、巾着切りのような女だと言っているのかと……」
今度は、おふくが驚く番だった。

「ええー。何でそんなに難しく受け取ったのよ。異人さんの言葉だと思わなかったのかい。ああ、それで……。あんたが消え去ったのも、おきちさんとうまくいかなくなったのも、たったそれだけのことで……なのかい。惚れ合った仲にしちゃあ、あっけないものだったのね……」

おふくが、さらに大きなため息を吐くと、鶴松は、それがどんな非難より厳しく咎められているように感じて、身をすくめた。

完全に濡れ衣だった。

いや、鶴松のような立場の者にすれば、単に誤解だったでは済まされなかった。

幼い頃より、憧れ、睦み合ってからは、より愛しく思えていたからこそ、誰に対しても誇れる、おきちのような評判の器量よしを掌中にした喜びは格別であった。

玉泉寺に奉公することになったときも、役人がおきちの器量の評判を聞いて選んだとも言われていた。

が、世間は、それだからこそ、そうした器量よしに対する嫉妬からくる反動により、おきちを唐人とか洋妾（ラシャメン）と蔑むようになっていた。

そうしたときにこそ、鶴松は、誰に対しても、おきちを擁護すべき立場にいたはずだった。

それなのに、鶴松は、むしろ、誰よりも、赤鬼のような異人に金で抱かれた恥るべき女だと思い、おきちを責め、見捨てた。

おきちを死に追いやった原因は、鶴松の所業以外には考えられなかった。

「そうそう……」

おふくは、さらに、急に思い出したように、話しを続けた。

「おきちさんの話なんだけどね。奉公に上がる前、首のところを掻いていたら、そこが腫れてしまったのらしいんだけど、それを見て、ハリスという異人さんは、手を引っ込めて、寝室から出ていけ、と怒ったのだそうよ。本当のところは分からないけど、ヒュースケン様の話だと、ハリスさんは、ご年配で、野蛮な国の疫病を恐れていたらしくて、……それに、ハリスさんは、疫病を恐れて、看護婦とかいう女中がほしいとお上に申入れたというヒュースケン様の話も聞いたことがあるし、三日間だけだし、本当に、何もなかったのかもしれないわね……」

おふくの言葉は、さらに鶴松を息苦しくさせ、この場から立ち去らねば、心の臓が止まってしまうような恐怖を感じた。

「……」

鶴松は、おふくが、さらに何を言ったのか聞き取れないほど動揺したまま、船宿を出ていった。

「だから言っていたじゃないの」

また、おきちの言葉が聞こえたような気がした。

その言葉に誘われるように、鶴松は、海辺へと、ふらふらと歩いていった。

おきちのもとから立ち去った三十年ほど前も、おきちと遊んでいた四十年前も、下田の風景は、今とそれほどに変わっていないはずだった。

それが、鶴松の心の醜さによって、色合いを変えていただけだった。

次第に、視界に大きく映る大海原は、温暖なこの地にあっては、親しみのある淡い青色を拡げていたが、それが、異人を招いた原因ではないかと思うと、ほのかに憎しみを感じていた。

だが、そうした自分勝手な思いが、おきちを追い詰めたのだと思うと、物事を単純に思い込んでしまう、己れの性格そのものが恨めしく思えていた。

日が暮れるまで、鶴松は、海を眺めて、おきちとのさまざまな思い出を空や海に思い描いていた。

おきちが尾張の内海からこの下田に引っ越してきたとき、鶴松は、近所にはいない、美しい顔立ちの可愛い、おきちを誰よりも気にかけているつもりだった。

おきちは、四歳という年齢であったのに、僅かに年長というだけで、そのように気にかかるのは、何かの縁があったのかもしれなかった。

下田一の売れっ子芸者となってからも、鶴松にだけは、気を許す仲だった。

いつも側にいるという気安さが、玉泉寺への奉公を境に、互いの胸の内を探り合わねばならなくなり、それも、鶴松の疑心のみを原因としたものであったことが、おふくの話からうかがい知れた。

黒船来航をきっかけに、次々と異人がやって来るという、得体のしれない時代の到来に、穏やかな気候に育まれた温和な人の心に、狂気のような激情を送りこんだともいえた。

鶴松は、異人への先入観から、破格の給金をもって買われたおきちを、側にいたおきちとは別人格の者と見なし、さらに、その異人からも 馬鹿にされるような下品な女に成り下がったのか、と不審の念を拡げた結果、己れの考え以外を受け入れることができない、この地の者らしからぬ人間に変ぼうしてしまった。

おきちが以前のままだったにもかかわらず、むしろ、鶴松が、異人を毛嫌うあまり、己れ

一人だけ潔癖であるかのように、おきちの傍らから離れ、赤鬼と恐れる異人たちに日本人が抱く印象である、人の心を喰らうような、悪心を持った生物に、鶴松自身がなり変わってしまい、人であるおきちを突き放してしまっていたのではなかろうか。

おきちとの思い出を思い描いていたはずなのに、いつしか、鶴松自身を責める映像ばかりが空や海の風景に重なり、海辺からも追われるように、知人宅に逃げ込んだ。

七

夜、床に就くと、さまざまな夢を見ては、目覚めた。

最初は、おきちが胸の上に乗ってきて、さあ、わたしと一緒にゆきましょう、と言うと、いつしか、鶴松は、稲生沢川の川底に引き摺り込まれ、息苦しさに、もがき苦しんみ、許してくれ、と叫んだが、声にはならなかった。

そこで、がばっと起き上がって目覚めると、おきちが横で、悪い夢でも見たの、と声をかけてきた。

横浜の家だった。

鶴松が、先程までの下田にいたのが夢だったのか、と思っていると、眼前のおきちの様子が変化した。

髪がすべて白髪になり、顔に皺が増え、身体が一回り小さくなったかと思うと、衣服がしっとりと濡れ始め、鶴松の寝床まで水に浸っていた。

「ここは、稲生沢川の底なのよ。横浜の家に似せてあるでしょう。わたしが川の神様に頼んで、特別に建ててもらったのよ。どう、これでずっと一緒にいられるわ……」

急に、場面は、玉泉寺の前に移った。

鶴松が、はっ、として振り向くと、ヒュースケンが、おきちとおふくを伴って立っていた。

「鶴松さん、すりですね、なんて言ってませんよ。スリーデイズね、と言ったんですよ。このままだと、おきちさんが、気の毒ですよ。あなたは、とっても悪い人だ」

ヒュースケンは、そう言って片目を瞑ると、おきちを送り出すように、その背を押して、さあ、と言った。

おきちは、少しもじもじしていたが、鶴松をじっと見つめると、あの東の島に行ってもう一度やり直してみないかい、と言って近づいてきた。

そこで、目が覚めた。

鳥のさえずりが聞こえた。

鶴松は、おきちの最後の言葉を頼りに、稲生沢川の上流に向かって出かけた。

途中、一連の夢などから、鶴松の思いつきを確認していた。
おきちが芸者をしていたころ、面白い話をする学者が客にいたと聞いたことがあった。
大昔、伊豆の東に島があり、それが沈んでできたのが、昔話に出てくる「竜宮城」のある世界だという話だった。
一つの世代に一度だけ、伊豆のあちこちの浜辺、川淵にその使いがやってきて、竜宮城の住人となる者を誘ってくれるというのだ。
その使いが、亀だというのが浦島太郎の物語だが、様々な使いがいるとのことだった。
船頭たちの好意で稲生沢川を上り下りしたとき、おきちは、このまま竜宮城に行けたらよいのにね、と言って喜んでいた。
それらの話と夢のおきちの言葉を重ね合わせ、鶴松は、今度こそは、とおきちが竜宮城に向かって飛び込んだ場所、お吉が淵に急いだ。
途中、おきちの声が何度も聞こえた。
「早く。もうすぐよ……」
鶴松は、行く手の空に、あるいは、木々のうちに、芸者のころに戻ったおきちの笑顔を見つけていた。
また、野に咲く藤袴を、おきちの背だと思い、あちこちで見つけては、幼いころに、おきち追いかけていたように、息を切らすほどに急ぎ足で、その背を追った。
そのおきちの顔や背を追いかけるあまり、鶴松は、船を使わず、道を使わず、ひたすら山の方へ分け入っていった。
すべてを捨て、ただ、おきちのもとにたどり着くことのみを考えて、鶴松は、もくもくと歩き続けた。
一年後、おふくが、お吉が淵で、川を眺めて呟いている鶴松を発見したとき、鶴松は、正気を失っており、ただおきちと一緒に竜宮城で暮らしているのだという話をするばかりとなっていた。
鶴松は、そのまま、死ぬまで、常に傍らにいるかのように、おきちに語りかけていた。